

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 9 月 5 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25463297

研究課題名(和文)日本人看護学生へのクロスカルチュラルナーシングプログラムの構築とその評価

研究課題名(英文) A study on development of cross-cultural nursing program in Japanese nursing students and the evaluation

研究代表者

入山 茂美 (Iriyama, Shigemi)

名古屋大学・医学系研究科(保健)・教授

研究者番号：70432979

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本人看護学生の異文化理解を向上させるための効果的なクロスカルチュラルナーシングプログラムの開発とその評価を目的として実施した。本研究の結果、看護学生の異文化受容態度は他者理解に影響し、その異文化受容態度は、海外での看護研修や外国人の看護ケアに影響を受けることが明らかとなった。サンプル数は少なかったが、フィリピン看護学研修を受けた看護学生は、研修前よりも異文化受容態度や他者理解が高まった。このような海外看護学研修は異文化理解を向上させる可能性があり、クロスカルチュラルナーシングプログラムとしての効果が期待できることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study aimed development of cross-cultural nursing program for Japanese nursing students and the evaluation. The results of this study revealed positive effect of cross-cultural receptive attitude on understanding others, and positive effects of overseas nursing training and experiences of nursing care for foreign patients on the cross-cultural receptive attitude. In spite of the small simple size, nursing training in the Philippines increased cross-cultural receptive attitude and understanding others among Japanese nursing students. Such an overseas nursing training could be improved cross-cultural understanding in Japanese nursing students and could be played as an effective cross-cultural nursing program.

研究分野：国際母子看護学

キーワード：異文化理解 他者理解 自己理解 海外看護研修 異文化看護

1. 研究開始当初の背景

看護ケアには、相互理解に基づく信頼関係が必要である。その相互関係では、看護者は自己理解に根ざした他者理解をすることが求められる。看護学生が対象者とコミュニケーションを行った場合、他者理解としての共感には至らず、自己中心的な観点から対象者のニーズを捉え、自分のやりたい看護ケアを実施しようとする傾向がある。それ故、自己理解や他者理解を深めるために、看護基礎科目として心理学やコミュニケーション学といった科目を開講している。さらに成育歴、教育歴、文化や生活習慣が違う対象者を理解するために国際看護の科目を設け、異文化交流として他国の看護学生との国際交流を行う看護系大学や看護専門学校も増加している。

研究者の入山が携わった看護学生の国際交流事業では、日本人看護学生は他国の看護学生との交流を通して、相手を受容し、相手との関係性を深め、信頼関係を構築し、相手から多くのことを学ぼうと行動し、相手との関係性から成長している自己を認識するなど、他者理解や自己理解の修得に繋がる学習を修得していた¹⁾⁻³⁾。つまり、看護学生は異文化理解を通して、看護の資質に必要な相手の価値観やあるがままの姿を受容し、他者との共感性を高め、相手のニーズを理解して適切なケアへと結びつけていくことができると考えられる。

厚生労働省の看護教育の内容と方法に関する検討報告では、看護教育において今後強化すべき内容として、人に寄り添う姿勢やコミュニケーション能力、対人関係能力の育成に繋がる教育を提示している。それ故、看護職としての資質として必要な自己理解や他者理解に繋がる異文化理解を向上させるための効果的なクロスカルチュラルナーシングプログラムの開発とその評価は、看護教育学の研究として重要な課題であると考えられる。しかし、現在、看護学生の国際交流事業では、異文化理解や他者理解に繋がる効果的な看護学生のクロスカルチュラルナーシングプログラムは構築されているとは言い難い。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本人看護学生の異文化理解を向上させるための効果的なクロスカルチュラルナーシングプログラムの開発とその評価を行うことである。具体的には下記の3点である。

- 1) 看護学生の自己理解、他者理解、異文化受容態度の各尺度の妥当性と信頼性の検討を行い、自己理解、他者理解、異文化受容態度の実態を把握する。
- 2) 異文化交流が看護学生の自己理解、他者理解、異文化受容態度に及ぼす影響を検証する。
- 3) 看護学生の異文化理解を向上させる効果的な教育プログラムを作成し、その評価

を自己理解、他者理解、異文化受容態度の尺度により行う。

3. 研究の方法

【研究対象と調査方法】

(1) 研究目的の1)と2)を達成するために、東海地域の大学で看護を学ぶ1年～4年の看護学生を対象に、無記名自記式質問票を用いた調査を実施した。質問項目は、基本的属性、既存の尺度を用いた異文化受容態度、自己理解、他者理解に関する質問、旅行以外の海外滞在の有無、海外研修の有無、外国人の看護ケアの有無等の64項目であった。【研究1】
 (2) 研究目的の3)を達成するために、海外看護学研修を受けた看護学生と受ける看護学生に無記名自記式質問票調査を実施した。海外看護学研修を受けた看護学生に対する質問票の質問項目は、基本的属性、看護研修を受けた国、海外研修期間、日本の文化との違いの程度とその内容、日本の看護との違いの程度とその内容、今回の研修で学んだ内容、研修前に必要と考える事前学習の内容等の13項目であった。【研究2】

フィリピン看護学研修前に実施した質問票の質問項目は、基本的属性、異文化受容態度、自己理解、他者理解に関する項目、旅行以外の海外滞在の有無、海外研修の有無、外国人の看護ケアの有無等の64項目であった。研修後の質問票の質問項目は、異文化受容態度、自己理解、他者理解に関する質問等の58項目と海外研修期間、日本の文化との違いの程度とその内容、日本の看護との違いの程度とその内容、今回の研修で学んだ内容の7項目であった。【研究3】

【分析方法】

(1) 各尺度の構成概念妥当性を検討するために、自己理解、他者理解、異文化受容態度の尺度に関しての因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。また、各尺度の内的整合性を検討するために、各尺度のクロンバック α を算出した。【研究1】

(2) 看護学生の異文化交流が自己理解、他者理解、異文化受容態度に及ぼす影響を検討するために、海外研修受講の有無と外国人の看護ケアの有無により、自己理解や他者理解、異文化受容態度に違いがないか、Mann-WhitneyのU検定を行った。【研究1】

(3) 海外看護学研修を受けた看護学生の日本の文化との違いの程度とその内容、日本の看護との違いの程度とその内容、今回の研修で学んだ内容をまとめ、どのような海外研修が異文化看護の理解に影響するのか検討し、クロスカルチュラルナーシングプログラムの作成をした。【研究2】

(4) フィリピン看護学研修を企画し、参加した看護学生の受講前後の自己理解、他者理解、異文化受容態度の比較を行った。【研究3】

4. 研究成果

【研究1】

522部を配布し、256部(回収率49.0%)を回収した。そのうち有効回答は253部(有効回答率98.8%)であった。

(1)対象の属性

看護学生の平均年齢は、21.5歳(SD=21.88)であった。性別では、女性が94%を占めた。1年生20.9%、2年生19.8%、3年生15.8%、4年生43.5%であった。看護師コースが81.7%を占めた。

(2)因子分析による各尺度の構成概念妥当性

自己理解の尺度は、4因子の構造であった。1項目の因子負荷量が0.33とやや低かったが、「自分の欠けている部分の把握」という重要な質問内容であるため、そのまま使用した。第1因子は、「自分の価値」などの4項目(因子負荷量0.72-0.87)であった。第2因子は、「自分らしい決定」などの4項目(因子負荷量0.56-0.94)であった。第3因子は、「自分自身の深い考え」などの4項目(因子負荷量0.54-0.76)であった。第4因子は、「自分が怒っているのかわかる」などの4項目(因子負荷量0.33-0.78)であった。

他者理解の尺度は、4因子の構造であった。1項目の因子負荷量が0.26と低かったが、「他者の価値を説明できる」という重要な質問内容であるため、そのまま使用した。第1因子は、「他者についての理解」などの4項目(因子負荷量0.71-0.93)であった。第2因子は、「他者の内面への関心」などの4項目(因子負荷量0.53-0.93)であった。第3因子は、「他者の受け入れ」などの5項目(因子負荷量0.26-0.89)であった。第4因子は、「他者の性格への関心」などの3項目(因子負荷量0.55-0.91)であった。

異文化受容態度の尺度は、4因子の構造であった。第1因子は、「外国人は日本人と同じ生活スタイルをとるべき」などの7項目(因子負荷量0.55-0.73)であった。第2因子は、「努力してまで外国人と交流しない」などの4項目(因子負荷量0.69-0.86)であった。第3因子は、「外国人とは緊張して話せない」などの4項目(因子負荷量0.51-0.91)であった。第4因子は、「外国文化の取入れは日本にとってよい」などの3項目(因子負荷量0.60-0.97)であった。

以上の結果から、各尺度はおおむね構成概念妥当性はあることが示された。

(3)各尺度の内的整合性

自己理解のクロンバックは、0.80、他者理解のクロンバックは、0.85、異文化受容態度のクロンバックは、0.88と高い内的整合性を示した。

(4)各尺度の得点とその尺度間の関連

自己理解の中央値は、78点(四分位範囲=72.0-84.0)、他者理解の中央値は、77点(四分位範囲=72.0-84.0)、異文化受容態度の中央値は、58点(四分位範囲=53.0-64.0)であった。自己理解と他者理解間には有意に正の相関があった($rs=0.47, p<0.001$)。他者理解と異文化受容態度には、有意に弱い正の相関があ

った($rs=0.17, p=0.007$)。自己理解と異文化受容態度には関連がなかった($rs=0.09, p=0.16$)。(5)自己理解、他者理解、異文化受容態度に及ぼす異文化交流に関する要因

異文化交流に関する要因、旅行以外の海外滞在の有無、海外研修の有無、外国人の看護ケアの有無は、自己理解と他者理解に関連しなかった。しかし、旅行以外の海外滞在の経験をした学生は、経験をしていない学生よりも異文化受容態度の得点が有意に高かった(中央値63点 vs 57点, $p<0.001$)。海外研修を受けた経験がある学生は、経験をしていない学生よりも異文化受容態度の得点が有意に高かった(中央値65点 vs 58点 vs, $p<0.001$)。外国人の看護ケアの経験をした学生は、経験をしていない学生よりも異文化受容態度の得点が有意に高かった(中央値65点 vs 58点, $p=0.034$)。

【研究2】

過去1年以内に海外看護学研修を受けた看護学生29名に質問票を配布し、9名(31%)から回答を得た。研修国は、中国1名、シンガポール1名、韓国1名、フィリピン3名、ドイツ3名であった。

日本と研修国の文化の違いを、非常に感じた学生は4名、感じた学生は4名、多少感じた学生は1名で、全員が文化の違いを認識していた。その文化の違いの内容としては、「宗教が日常生活に根付いている」、「食文化の違いがあり、甘い食べ物や辛い物を好む」、「不衛生な路上の屋台で食べ物が売られている」、「多国籍料理が多い」、「様々な言語が話されている」、「目上の人に対する敬意が強い」、「初対面でも積極的に話しかける」という内容であった。

日本と研修国の看護の違いを、非常に感じた学生は1名、感じた学生は5名、多少感じた学生は1名、感じなかった学生は1名であった。多少感じたと感じなかったと回答した学生の研修先は、シンガポールとドイツであった。その看護の違いの内容は、フィリピンと中国では、「プライバシーの配慮の不十分さと家族による日常生活援助」、ドイツでは、「感染予防の仕方」、韓国では、「看護師は医療行為中心でベッドサイドケアの少なさ」を挙げている。シンガポールでは、「宗教上の理由の為女性の医療職しか女性の対応ができないこと」を述べていた。

研修先の看護学生や看護教育については、フィリピンでは「看護学生に求められるものが高いこと」、ドイツや韓国では、「実践的な実習が多いこと」が挙げられていた。海外で看護研修を受けた学生は、文化や国民性が看護ケアにも影響をする点を認識していた。

研修前に必要と考える事前学習の内容では、日本の文化や看護を十分に説明できるように学習する必要性、日本と研修先の看護教育の違い、医療の仕組み、保険制度や社会保障制度の違いについて、医療英語、専門用語

としての英語であった。

以上の結果より、海外看護研修により、看護学生は、自国と他国の文化や看護を比較しながら、異文化理解を促進できることが示唆された。さらに、看護学研修の前に、異文化理解を高めるために、研修先の文化や看護および医療についての知識を、英語により事前学習として学習することが重要であることが示唆された。異文化理解を促す海外看護学研修のプログラム(クロスカルチュラルナースィングプログラム)として、6日間のフィリピン看護学研修を企画した。その研修内容は、フィリピンの看護学部での講義や演習への参加、病院(小児科および産科病棟、分娩室)、ヘルスセンター、老人収容施設、孤児収容施設の見学、フィリピンの世界保健機関西太平洋地域事務局での講義とした。その研修の事前学習では、研修国の言語、文化、医療についてフィリピン人留学生から、2回に分けて英語で学習できるよう企画した。

【研究3】

事前学習を受け、フィリピン看護学研修に参加した学生は、全員3年生で、女性であった。旅行以外で海外に滞在した経験者は1名、外国人に対する看護ケアの経験者は1名、海外での看護研修の経験者は1名であった。日本とフィリピンの文化の違いを、非常に感じた学生は1名、感じた学生は2名であった。その文化の違いの内容としては、「家族の結びつきの強さ」、「宗教の影響力が強く、神に祈ることが重要視されている」、「プライバシーのなさ」、「気さくにだれにでも声をかける」、「食文化として、糖質や脂質の多い食べ物を好む傾向がある」、「路上にゴミが散乱し、道路の舗装も不十分」を挙げていた。

日本と研修国の看護の違いを、非常に感じた学生は2名、感じた学生は1名であった。その看護の違いの内容は、「看護師と助産師の立場の違い」、「看護師の仕事の少なさ」、「看護師不足、医療物資不足からくる不十分なケアや医療」、「家族によるケアや医療処置の多さ」、「コミュニティにおける看護や医療の需要の違い」、「看護ケアにおいてプライバシーを重要視していない」、「看護学生でも注射などの医療処置を患者にしている」、「早期母子接触を徹底している」を挙げていた。

その3名全員の他者理解と異文化受容態度の得点は、研修前よりも研修後の得点は高くなった。自己理解は、2名は研修前よりも研修後の得点は高くなったが、1名は同点であった。サンプル数が少なかったが、フィリピン看護学研修を受けることにより、異文化受容態度や他者理解が高まったことから、このような海外看護学研修は異文化理解を向上させる要因と考えられる。

今後の課題として、研究3のサンプル数を増やし、海外看護学研修が異文化受容態度や他者理解への効果について、統計的に検証を行うことが課題である。

<引用文献>

- 1) 入山茂美、大石和代、松本正、フィリピン看護学実習の評価、インターナショナル・ナースィング・レビュー、30巻5号、2007、88-90
- 2) 入山茂美、大石和代、松本正、途上国における看護学実習のための事前学習の検討：フィリピン看護学実習の事前学習を振り返って、看護教育、46巻2号、2008、144-148
- 3) 入山茂美、日本人看護学生への国際保健看護教育科目の開講時期の検討、日本国際医療、25巻2号、2010、113-119

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

鈴木岸子、入山茂美、フィリピン大学における看護教育報告-名古屋大学医学部保健学科看護学専攻とフィリピン大学看護学部との国際交流事業-、椋山女子学園大学研究論文集、査読なし、Vol.45、2014、pp71-82

〔学会発表〕(計 3 件)

入山茂美、日本人看護学生がフィリピン看護学研修を通して認識した異文化看護、日本国際看護学会第1回学術集会、2017年11月11日、横浜市

入山茂美、日本人看護学生の異文化看護体験、日本国際保健医療学会第36回西日本大会、2018年3月10日、名古屋市

新井志歩、入山茂美、教科書比較による患者の羞恥心に関するフィリピンと日本における看護教育の違い、日本国際保健医療学会第36回西日本大会、2018年3月10日、名古屋市

〔図書〕(計 1 件)

入山茂美、医学書院、助産学講座9 地域母子保健・国際母子保健 第6章国際母子保健、2016、pp216-253

6. 研究組織

(1) 研究代表者

入山 茂美 (IRIYAMA Shigemi)
名古屋大学・医学系研究科・教授
研究者番号：70432979

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし

(4) 研究協力者

Sheila R. Bonito
University of the Philippines Manila・
College of Nursing・Professor